

科目名	生命倫理特講	担当者	ハシモト カズノリ 橋本 和法	期間	通年	単位数	4
-----	--------	-----	--------------------	----	----	-----	---

【科目概要】

目的	<p>生命倫理について、氾濫する情報に惑わされず、科学的に検証されたデータを基に、現状で最も新しく、かつ信頼性の高い知見を得るためには、どのような文献を基に、どのように考えれば良いか、という方法論を身に付ける。教材、参考図書を提示してあるが、必要な文献は自分自身で検索することも学ぶ。</p> <p>課題としては癌患者などの終末期医療における緩和医療、脳死、尊厳死における現状と倫理的な問題についてと生殖補助医療におけるその医療技術の現状と社会倫理的な問題について考察を行う</p>		
到達目標	<p>【一般目標（GIO）】 問題発見・解決力：事象を注意深く観察して問題を発見し、解決策を提案することができる。 論理的・批判的思考力：得られる情報を基に論理的な思考、批判的な思考をすることができる。</p> <p>【行動目標（SBOs）】 生命倫理に関する課題を取り上げ、その問題点を整理し最新の知見を基に、その課題に取り組む方向性を見いだす方法論を身に着ける。</p> <p>【準備学修項目と準備学修時間】 1つのレポート作成に当たり、基本教材および参考文献の読み込みに25時間以上、Manaba-Folioへの提出・再提出のやりとりに20時間以上を目安とする。</p>		
学修方略 (方法)	<p>【アクティブラーニングの有無・学修媒体等】 レポートの推敲課程において、Manaba-Folioの全受講者用の掲示板機能（「スレッド」）に届いた受講者の質疑に対して応答し、その過程を受講者全員に公開する。</p> <p>【学修方略（LS）】 レポート課題に沿って、テキストや参考図書を基に、自分自身で題材を取り上げ、その題材に関する必要な文献検索を行い、それに対する考え方をレポートとしてまとめる。疑問が生じた場合は、Manaba-Folioを通して適宜科目担当者に質疑する。</p>		
スケジュール	<p>前期：教材1のレポート課題(1)の草稿は7月末、課題(2)は8月末を目処に提出する。取り上げる題材については、草稿としてまとめる前に、メール等で相談することが望ましい。いずれの課題も9月中旬までに最終稿を提出する。</p> <p>後期：教材2のレポート課題(1)の草稿は11月中旬、課題(2)は12月中旬を目処に提出する。取り上げる題材については、草稿としてまとめる前に、メール等で相談することが望ましい。いずれの課題も平成31年1月上旬までに最終稿を提出する。</p>		
成績評価	種別	割合	評価基準
	レポート	75%	レポートの内容に関し、取り上げた題材の適切性、考え方の科学性・妥当性、最新の知見の反映、記述の論理性、自分自身の専門分野との関連性を評価する。
	平常評価	25%	レポートの構成や表現に関し、全体の記載方法、図・表の活用方法、引用文献の記載方法等を評価する。
履修者への要望	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) レポートを作成する前に、取り上げる題材やレポートの構成（目次案等）について、メール等で連絡相談して下さい(<a href="mailto:hashimoto.kazunori@nihon-u.ac.jp">hashimoto.kazunori@nihon-u.ac.jp</a>)。</li> <li>2) 題材の選択は自由ですが、発想が面白い、ユニークな題材を歓迎します。</li> <li>3) レポートの構成については、取り上げた題材の簡潔なレビューと同時に、何か一点、最新の知見を反映した上で、自分自身の考察を加えることを基本とします。</li> <li>4) レポートは、簡潔明瞭にまとめることを心掛けて下さい。</li> <li>5) 教材・参考図書を全て読み込む必要はありません。むしろ題材に関連した文献は自分で検索して下さい。</li> <li>6) 引用文献については、各々の研究分野の形式に従って、適切に記載して下さい。</li> </ol> <p>注1：後期の課題については、これまで生物学・生命科学を履修していない場合は、内容が難しいと思われるため、スクーリングを受講すると同時に、不明の点はメール等で問い合わせして下さい。</p> <p>注2：本レポートは開示しませんが、個人情報に関わる事項を記載する必要はありません。または適当にフィクション化しても結構です。</p>		

【レポート課題】

基本教材 1	
教材の概要	著者名： 坂本百大/青木清/山田卓生編著 教材名： 生命倫理 21世紀のグローバル・バイオエシックス（北樹出版、2005年） ISBN: 978-4-77-930004-2
	バイオエシックスという学問分野は20世紀の後半に現れた新しい研究分野である。その誕生の動機から説き起こし、健康、病気、治療などの概念を整理して、バイオエシックスの個々の問題、生と死、エイズ問題、インフォームドコンセント、差別問題、パーソン論、世代間倫理など、初期に欧米で議論されていた諸問題を検討する。
参考図書	ピーターシンガー『生と死の倫理』（昭和堂1998年）ISBN: 978-4-81-229715-5
履修上のポイント	生命倫理が1970年代になって現れた全く新しい現代的な学問であること、そしてその時代の背景を理解すること。またそれが単に文系でも理系でも、社会系の学問でもなく、学際的な話題であること理解するのが肝要である。
レポート課題 1	生命倫理成立の思想的、社会的背景を考察する。生命倫理が古来の医の倫理と異なること、近代的なヒューマニズムの流れにあること、従って近代的な人権思想に基づくものであることに留意し、パターナリズムからオートノミーへの思想的転換の歴史的な背景も踏まえるべきである。また1960年代の科学的技術革新に対するテクノロジー・アセスメント運動の一環としての生命倫理の性格も十分に理解すべきである。この時期の社会状況、差別問題なども分析する必要がある。 <b>留意点：</b> なるべく自分自身の経験を基にすること（家族や周囲の方の事例でも可）
レポート課題 2	安楽死と脳死を巡る生命倫理上の議論を整理し批判する。カレン・クライン事件などのケーススタディをまず試み、その時代性を明確にする。また社会的、法的、倫理的問題を区別して論じる。脳死問題については、医学的問題、臓器移植との関連性を一般的に論ずるとともに、日本における対応の特殊性について、倫理的、民俗学的分析も付加する必要がある。 <b>留意点：</b> なるべく自分自身の経験を基にすること（家族や周囲の方の事例でも可）

基本教材 2	
教材の概要	著者名： 坂井律子著 教材名： 「いのちを選ぶ社会 出生前診断のいま」（NHK出版2013年） ISBN:978-4-1408-1662-6
	2013年から「無侵襲的出生前遺伝子診断:NIPT」の臨床研究が始まり、これまでの羊水検査が行われてきた時代と比べ出生前診断を希望する夫婦が増加すると考えられる。その際に生ずる生命の選択に関する倫理的問題について論じている。
参考図書	ヒト胚の作成・利用に係る指針の規定の現状について <a href="http://www8.cao.go.jp/cstp/tyousakai/life/haihu80/siryo3-2.pdf">www8.cao.go.jp/cstp/tyousakai/life/haihu80/siryo3-2.pdf</a>
履修上のポイント	生殖補助医療技術の発達に伴い、最近倫理的な問題が様々な面からクローズアップされてきている。生殖医療は世代の継承に関与しており、その治療結果が個体にとどまらず子孫に影響されていく特殊性を有する。生殖に関わる倫理には、生まれてくる子の同意を得ることができないことから、施術においては自己決定権だけでは行使できない状況もありうる。こうした状況の中では人権、社会的倫理、法的な観点から生殖医療行為について論ずる必要があると考えられる。
レポート課題 1	新たな技術としての、着床前診断、配偶子提供、代理懐胎、ES細胞、iPS細胞からの配偶子作成のいずれかを取り上げ、対象とする疾患とその診断・治療方法の原理、を論ずること。最近の生命科学技術の進展に関連する、自分自身の担当業務、または日常生活上での出来事に関する事項でも可。
レポート課題 2	課題1の診断・治療等を実施する際に生ずる倫理的問題を取り上げ、その技術的限界を踏まえた上で、これらの胎児選別、親子・家族という社会の枠組みを改変させるかもしれない問題、いかに社会のコンセンサスを得るかなどを論ずること。または課題1で取り上げた題材における、社会的な問題でも可。